



ひらほく新聞

ひらほくで検索!
★ホームページ・ひらほくランド★
http://www.hirahoku.com/
☆ホームページにて ひらほく新聞を
閲覧・ダウンロード可能になりました!

発行所 読売センター平塚北部 (ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

わもん (話+聞) 聞くを極める 人はこんなにも 輝きますか!

◎荻原秀樹 (やぶちゃん) 株式会社わもん代表
1963年、徳島に生まれ、大阪府在住。人材育成コンサルタント。20代で西洋哲学を、30代で東洋哲学を学ぶ。当時から社会活動として、志に賛同した企業経営者や、政治家への応援・コンサルティングを展開。40代で東洋哲学と西洋哲学を融合させた「わもん (聞くことによる自己修養法)」を完成させる。「人を動かす」から「人が動き出す」へ、そして、豊富なボランティア活動、会社経営、何千人との出会いによる様々な経験…等々、あらゆる場面に於ける人間学の実践と探求から、「わもん」は、潜在能力を無限に引き出す方法として進化を遂げる。現在は、地域コミュニティの活性化に貢献するべく、話聞塾 (聴き方教室) を全国で展開中。

「わもん」とは、荻原秀樹氏 (やぶちゃん) の長年にわたるコンサルティング経験から生み出された、いわば和製コーチング。二元的な会話の技術ではなく、一元的な話聞一如の境地で行う、以心伝心による相互理解です。人間という生き物の全てを尊重する、絶対肯定が魂の共鳴に似ない、深層心理に眠る本当の答えを見つけ出します。それは最高に平和で情熱的で創造性に富んだ、話し手と聞き手の共同芸術です。

【わもん (話聞)】話を聞くことによる自己修養法。「絶対尊敬」「完全沈黙」を基本とし、「話聞一如」にいたることをめざして、話し手の話を徹底的に聞く修行。聞き手は話し手の心の奥底にある「声なき声」を聞き、話し手の気づきや自己成長を手伝う。また、その過程から自分自身の気づきを得て、自ら成長していく。最終的には、自分の「声なき声」を聞き、自らを修める「自己わもん」の習得を目標とする。

先月6月、「やぶちゃんとアニキの初コラボ講演会」に参加してきました。「株式会社ゆめさぼーど」のメンタルコーチ、アニキこと筒井正浩さんは、あの大阪府・履正社高校の甲子園出場にもメンタルサポートで寄与した方。自分は一昨年、アニキの速読講座に参加して、以来教わった眼筋トレーニングを続けています。お二人のコラボ講演で、とても不思議な、そして感動いっぱい時間、空間を共有体験してきました。

自分を、そして話し手を「絶対尊敬」し、「心の周波数」を合わせて、一切の感情を鎮め、ありのままに受け止める (完全沈黙)。聞き手の意識を「今・ここ・自分・目の前の話し手」に極限まで集中する、いわゆる『ガチ聞き』。お二人の初コラボ「愛のミックササンド」とは、やぶちゃんが話し手をガチ聞きしつつ、どんどん入っていき、本人がもうこれ以上無理というタイミングで、これしかない! というアニキの質問が入り、最後にそこを突破して眠っている自分の本当の声、答えを導き出すという形態。

やぶちゃんは、少しずつ語り出す話し手の声を心からの声か、中身が軽い重いなど、音の性質でその違いを確実に判断する。もう限界、というタイミングでアニキのひと言の質問。すると嘘のように違う声で眠っていたキーワードが表れ出てきた。アニキとのコラボによって、さらにその関係性が深まり、壇上の3人がしっかりと繋がっていたからこそ、導き出された答え。全身全力の思いがみんなに伝わり、見ている方も皆、一緒に入っていくように感じ、会場全体は物凄いエネルギーが生まれていた。そして、自分の壁を突破、「自分の中」へ入ってゆく瞬間を会場の参加者全員で共有。

「100%信用している、サポートすると決めているので、しっかりと繋がっていて絶対に突破できると分かっている」とやぶちゃん。話し手のコメント。「潜っていたくなくて、何度も逃げそうになつたとき、安心してやぶちゃんが付いてきてくれるので入っていった。眠っていた心の奥の悩みを壇上でカミングアウトできて、これからいけそうなきがします! とてもスッキリした気分です」。

本当は自分は素晴らしいのに何らかの理由で自分を信じ切れない人が多いという。自分以上に自分を信じ切ってくれる方がいると、過去の思い込みも全部塗り替えることが出来る。まさにその通りだと実感できた素晴らしい体験でした。機会がありましたら、お二人の講演会へぜひどうぞ!

「馬を水辺に連れていくことはできるが、水を飲まずことはできない」
「他者の期待を満たすように生きること、それは自分の人生を他人任せにすること。これは、自分に嘘をつき、周囲の人々に対しても嘘をつき続ける生き方なのです」

「人間の悩みは、すべて対人関係の悩みである」
「権威の力を借りて自らを大きく見せている人は、結局他者の価値観に生き、他者の人生を生きている」
「アドラー心理学とは、他者を変えるための心理学ではなく、自分が変わるための心理学です。他者が変わるのを待つのではなく、あなたが最初の一步を踏み出すのです」

年頭に読んでとても学びの多かった書籍「嫌われる勇氣」を再度熟読してみました。昨年末の発売ですが、大変な反響となりベストセラーとなっています。

フロイトやユングと並び「心理学の三大巨頭」と称されるも、これまで日本であまり知られることがなかったアルフレッド・アドラーの思想(アドラー心理学)を、「青年と哲人の対話篇」という物語形式を用いてまとめた一冊。欧米で絶大な支持を誇るアドラー心理学は、「どうすれば人は幸せに生きることが出来るか」という哲学的な問いに、きわめてシンプルかつ具体的な「答え」を提示します。

実は昨年、アドラー心理学による子育て術をブログに書かれていた方と知り合い、権威の野田俊作先生の講演CDを送っていただきました。叱らない、ほめない、アドラー流『勇気づけ』の子育て術とは…。まずは、本書に触れていただきたいと思います。

重要なフレーズを少し紹介します。
「大切なのはなにが与えられているかではなく、与えられたものをどう使うかである」
アドラーの目的論「これまでの人生になにがあったとしても、今後の人生をどう生きるかについてなんの影響もない」

「自由とは、他者から嫌われることである。すべての人から嫌われないように立ち回る生き方は、不自由きわまりない生き方であり、同時に不可能なことです。他者の評価を気にかけず、他者から嫌われることを怖れず、承認されなくてもいいというコストを払わないかぎり、自分の生き方を貫くことはできない。つまり、自由になれないのです」
「この人はわたしになにを与えてくれるのか?」ではなく、「わたしはこの人になにを与えられるか?」を考えなければならぬ
「いちばん大切なのは、他者を『評価』しない、ということ。評価の言葉とは、縦の関係から出てくる言葉です。もしも横の関係を築けているのなら、もっと素直な感謝や尊敬、喜びの言葉が出てくるでしょう」

「もつとも大切なのは、子どもが窮地に陥ったとき、素直に親に相談しようと思えるか、普段からそれだけの信頼関係を築けているか、になります。介入しようとはせず、過度に注目することをやめる。そのうえで、困ったときはいつでも援助する用意がある、というメッセージを送っておく。そして、たとえ相手が自分の希望通りに動いてくれなかったとしてもなお、信じていることができるかどうかです」